

南武 タイの新工場が本格稼働を開始

特殊油圧シリンダを製造する南武。社員数100名強の中小企業ながら、自動車・製鉄メーカーには欠かせない存在となっている。昨年の中国・常州に続き、今年はタイにも新工場を建設。7月から本格稼働を始めたタイ工場は、アセアン地域の重要な輸出拠点という位置付け。中小企業ながら海外進出にも積極的な同社である。

タイを拠点にインドネシアなど 東南アジア地区へ製品を供給

「タイに初めて進出してからちょうど10年。区の支援などもあって、ここまで来ることが出来ました」と語るのは、南武社長の野村和史氏。

特殊油圧シリンダを製造している南武。町工場の集積地・京都大田区に密集する中小企業の雄である。そんな同社がタイに新工場を建設。5月から順次稼働を開始、7月から本格稼働を始めた。

新工場はアマタ・ナコーン工業団地内にある。確保した敷地面積は約6500平方メートル、うち1棟目の新工場が約2500平方メートル。バンコクから車で1時間強のバンコク東部に位置し、昨年起こった洪水のような水害リスクは低い。ここからタイやインドネシアなど、東南アジアの金型メーカー向けに特殊シリンダを製造・販売する方針だ。

南武のタイ進出は2002年から。当初はとある工場の一角に300平方メートルを借りてのスタートだった。06年6月から事業拡大に伴い、大田区が設立した「オオタ・テクノ・パーク」に移転。事業が軌道に乗り、徐々にアセアンへの輸出も開始。増産体制が必要との判断で新工場の建設を決めた。



南武社長 野村 和史 Nomura Kazushi のむら・かずし

1938年生まれ。61年青山学院大学経済学部卒業後、南武鉄工入社。資材部、経理部を歴任。火災による経営断念のため退社。日幸電機製作所、ドッドウェルに勤務した後、84年南武鉄工（現・南武）再入社。95年より社長をつとめる。

タイの進出に関わり、05年からタイの現地法人社長をつとめた南武副社長の野村伯英氏は「タイは産業集積が進み、交通などのインフラも整っている。しかも、昨年の洪水被害で落ち込んだ反動でいまは需要が上向き。自動車や二輪などを中心に市場が急成長しているということ。景気低迷が続く日本とは違い、アジアのダイナミズムのようなものを感じる」と語る。

南武が製造する特殊油圧シリンダは、自動車業界向けの金型用中子抜きシリンダで市場シェア7割、製鉄メーカー向けの鋼板巻取り用ロータリジョイント

ト・ロータリシリンダでは市場シェア8割を占める。もはや、自動車・製鉄メーカーには欠かせない存在だ。

タイはアジアのデトロイトと呼ばれる、自動車生産が盛んな地域。日本では国内市場の縮小が続くが、経済成長が続く東南アジア市場の開拓で収益力を強化する方針である。

少量多品種、短納期、そして高品質のモノづくり

社員数が100名強の中小企業ながら、南武はグローバル展開に積極的。タイに先駆け、2001年にはアメリカで米ファイブスター社と提携し、メンテナンス工場を立ち上げているし、昨年には中国・常州にも工場を建設・稼働している。

当初はタイの工場から中国市場向けに製品を供給しようと考えていたのだが、中国に生産拠点を構える顧客からの要望に応じて中国に進出。東京本社で働いていた中国人留学生の社員を現地法人の社長に抜擢。工場のある常州・武进高新技术産業開発区内には、職業訓練学校が併設されており、約8万人の学生がNC旋盤などの技術を習得している。将来的にはこの学生の採用を増やしていく。

社長の野村氏は「中国の現地メーカーと価格

で勝負しているには勝ち目はない。当社はあくまでも技術を高め、ニッチな部分で付加価値を付けた製品で勝負したい」と話している。

近年、円高や電力不足、法人税の問題などもあって、日本企業の海外進出は高まるばかり。『ヒト・モノ・カネ』に乏しい中小企業であっても、これからの時代を生き抜くには海外進出を真剣に検討しなければならぬ時代になった。その意味で、南武は海外進出

においても素早い対応をしているといえよう。そして、南武の技術力は日本だけでなく、タイや中国といったアジアや米国など、海外でも定評がある。今後はインドでも新工場の建設を検討中だ。

野村氏も「少量多品種、短納期、そして高品質のモノづくりが当社の生命線。顧客ごとの注文に合わせる形で、他社には真似できない商品力を磨いていくしかない」と語る。南武の挑戦は続く。



副社長 野村 伯英 Nomura Takahide のむら・たかひで

1973年生まれ。96年工学院大学工学部卒業後、積水ハウス入社。一級建築士。2001年南武入社。05年タイ法人社長。08年、取締役営業部統括部長。11年副社長。



南武のタイ新工場



タイ新工場の開所式